



少し先が見えるように

教務主任 纈纈康暢

私には中学生と高校生の二人の子どもがいます。次男は産まれてすぐ病気にかかり、自分の意志で自由に手足を動かすことはできません、声を出すこともできません。基本的には寝たきりです。だから、出かける時には車いすで、仰向けに近い状態で移動します。

家族で多治見市のセラミックパークに行った時のことです。駐車場から施設に入っていく道は、陶器のかけらが天井に散らばめられてとてもきれいでした。次男は普段とは違う天井に興味津々でした。ふと、私も天井を見ながら上を向いたまま歩き、次男の感覚を味わってみました。きれいだなと思う反面、進行方向が全く見えず、ただ景色が流れているような感覚になりました。普段、自分がぼんやりとでも前を見ながら進んでいることに気付き、次男の車イスの背もたれを少し上げました。進行方向が見えた次男がどう思ったかは分かりませんが、自分が向かう方向が見えたことに何かを感じてくれていたらいいなと思いました。

義務教育の9年間は、きっと景色が自然と流れていくようなものなのだと思います。自分の意志で先を見据えなくても進んでいき、年齢とともに学年も上がっていきます。そして、見える景色の中には、キラキラしたものもあれば、中には目にしたくないようなものもあります。そのどれもが時間とともに過ぎていきます。でも、だからこそ、今自分はどこにいるのか、どこに向かっているのかを時々確認する必要があると思います。義務教育を終えたとき、生徒は自分の向かうべき方向を見定め、そこに向かって自分の足で歩むことになります。私たち教師や保護者ができることは、少し先が見えるように視界を広げてやること、自分の足で歩いていける逞しさを身に付けてやることだけなんだろうと思います。

学校の教育目標「ひとりだち」は、生徒だけでなく、見守る保護者、教師にとっても立ち返るべき目標なのだろうと思います。

CとL「見えない不安」

